

北杜夫と世田谷

——「駿馬」にみる羽根木公園——

若 井 健

一、はじめに

北杜夫（本名斎藤宗吉、一九二七—二〇一一）は、現在の東京都港区南青山に歌人・斎藤茂吉とその妻・輝子の次男として生まれた。北が発表した作品の多彩さに比べ、彼に関する研究論文が少ないこと、かつその論文の種類も『夜と霧の隅で』（一九六〇）をはじめとした代表作の作品論、旧制松本高等学校在学時から親しんでいた「山」や彼が晩年まで患っていた躁うつ病をテーマに据えた作家論が多くを占めているということとは拙稿「北杜夫作品における音楽——『牧神の午後』『幽霊』を中心に——」（『成城国文学』三十九号、二〇二三）にて述べたとおりである。前稿では、北が物書き

を目指す途上にあつたのにもかかわらず今まで研究論文で取り上げられることが少なかったことを踏まえ、東北大学医学部在学時を軸としてテーマを設定した。北について論じられる際、旧制高校時代を過ごした松本について触れられることは多いものの、大学時代を過ごした仙台にフォーカスを当てたものは殆ど見られないのが実情だったのである。そして、仙台と同じく北にゆかりのある土地の中でありながらも同じように論文で取り上げられることが少ないのが、東京・世田谷である。

北と世田谷のつながりは、彼が生まれる約三年前の一九二四年一二月に、祖父・斎藤紀一が設立した青山脳病院が火災で焼失したことを機に世田谷区松原へ移転したことから始まる。しかし第二次世界大戦により病院は再度焼失、北自身も

旧制松本高校への進学により寮に住み始めたことから一度は世田谷から離れるが、『どくとりマンボウ航海記』（一九六〇）ヒット後、再び松原に戻り晩年まで居住した。今まで「世田谷」をテーマに論が展開されることが少なかった理由としては、彼の幼少期の体験は生まれの地である青山でのものとして扱われることが多かったということ、そして北に関する論文や論評が多数発表され、かつ新潮社より『北杜夫全集』が出版された一九七〇年代³はまだ世田谷を舞台とした作品が少なかったことが挙げられよう。一九九〇年に入ってから、北は幼少期を回想する形で世田谷の情景を作品内に盛り込んだり、エッセイに綴ったりすることが多くなったものの、未だに研究論文の題材として扱われることは少ない。

このように北杜夫と「世田谷」は近い場所にありながら研究題材としては遠い関係性にあった。本稿では、世田谷の地を舞台とした短篇作品「駿馬」（『消えさりゆく物語』所収）を取り上げ、北にとって長年住み続けた世田谷という土地がどのような立ち位置にあったのかを考察する。従来の研究に於いて「青山」「松本」を中心として提唱されてきた「北杜夫の原点」の再検討を行いたい。

なお、「駿馬」本文の引用は『消えさりゆく物語』文庫版

（新潮社、二〇〇三）に拠った。

二、作品概要

本作の初出は『小説新潮』（新潮社）一九九二年二月号であり、二〇〇〇年四月に短篇集『消えさりゆく物語』（新潮社）の一篇として収録された。晩年にかけてエッセイの執筆が活動の大半を占めていた北にとって、本書が生前に刊行された最後の短篇集となった⁴。

この短篇集に収められている作品群の特徴として挙げられるのは、それぞれが独立しているながらも、多くの作品に共通して「幻覚」、そしてタイムスリップの要素が現われることである。

本作のあらすじを記す。

「私」は妻、娘夫婦、孫とともに羽根木公園で開催されている「梅祭り」へ出かけ、人混みの中をかいぐりながら歩いていた。屋台の並ぶ道の中、トウモロコシやイカを焼く火や人いきれの影響でムツと濁ったような空気が立ち込めており、足腰が弱っていた「私」は疲れと息

苦しさを感じ、意識が朦朧としていった。

しばらく経ちふと目を開くと、そこは第二次世界大戦末期のドイツであった。周りの兵士の叫ぶ声を聞き、たった今ソ連軍が迫ってきておりベルリンまで逃げなければいけない状況であることを知る。彼は、明確に命の危機にさらされていた。

死に物狂いで走っていた「私」であったが、後方から馬が走ってくる音が聞こえてくる。後ろを振り返ると、若い女が一頭の黒い馬の鞍にまたがり、さらにもう一頭の馬の手綱を引きながら襲^{ツレ}歩^キで疾駆してくる姿があつた。目の前に現れた若い女は、汗まみれになった馬から最後の一頭に乗り換えていった。先程まで乗っていた馬は残されたままである。「私」はかねてより乗馬を趣味としており、若い頃から夏の軽井沢で経験を積んでいる。

「私」は銃声と砲声の轟くこの場所から生き延びるにはこの馬に乗るしかないと考えた。その黒馬はたくましい種馬^{スプリオン}であり、少しずつ馬の体力も回復し、たちまち疾走を始めた。彼はなんとかしがみつき、命からがらベルリン市街へと辿り着いた。

「私」は馬に揺られながら空気の澄んだ並木道を歩いて

いたところ、樹木の影に鉄兜をかぶった少年兵を見つけた。「私」は首都ベルリンを死守しようとしているのが、片手にバズーカ砲を持った愛くるしい少年兵であることに驚愕した。玉碎の決意のにじむような決死の眼差しをした彼らを見て、老いた「私」の目には不意に涙が溢れ、視野が霞んでいった。

ハッと目を開くと、そこは元居た羽根木公園であつた。

「私」は意識が遠のいていたことを家族に心配されたが大丈夫だというふうに鎮めた。彼らは再び梅林へと向かった。「私」にとっては、緑に満ちたこの清浄な空気が、先程までのベルリンの並木道のすがすがしい大気に似ているように感じられたのであつた。

本作および『消えさりゆく物語』に関する先行研究は決して多くはなく、かつそのうちの多くがこの「幻覚」、タイムスリップを主とする「時間」をテーマに論じるものとなっている。菅野昭正は、新潮文庫版の解説で、「不快さ、重苦しさ、醜さ等々に汚染された現実から、できれば遠ざかっていたいという心の姿勢」が短篇集を通して見て取れ、「駿馬」における「私」は、梅祭りが開催されている羽根木公園で感

じた疲れからの「現実忌避」により第二次世界大戦末期のドイツの幻視を見ていると推察している⁵。

また、戸田一康は、『消えさりゆく物語』を取り上げた論考に於いて、直接「駿馬」への言及はおこなっていないものの、『消えさりゆく物語』には、それぞれの作品の主人公が「幻想、幻視」を通過して「消滅」へと至る流れがあり、かつ本書における「時間」は、現在から未来の消滅へ至るという直線的な流れではなく、現在から一旦過去に戻り、そこから改めて未来へ向かうという複雑な道筋を辿ると指摘している⁶。

このように、「駿馬」および『消えさりゆく物語』に関する論考は「幻覚」「時間」に関わる言及が中心となつて展開されているが、本作を論ずる上では「羽根木公園」という舞台についても検討する必要があると考える。本稿では、「駿馬」を「場所」の観点から捉えなおし、具体的には本作の舞台として「羽根木公園」が置かれた意義に関して、羽根木公園の歴史、そして北杜夫の人物史と関連させながら論じていく。

三、「駿馬」の舞台・羽根木公園／根津山

1 根津山と北杜夫

羽根木公園は一九五六年、東京都世田谷区代田に都立公園として開設された。小田急電鉄小田原線の梅ヶ丘駅にほど近い場所に広大な敷地をもって造成され、一九六五年には世田谷区へと移管されている。園内には六五〇本に及ぶ梅が植樹されており、毎年二月上旬から三月上旬にかけて「せたがや梅まつり」が開催されている⁷⁾。

なお、公園として開設される前は、ここは森林の広がる台地であった。この台地はもと一七〇〇年頃に「六郎次」という鍛冶屋が住んでいたことから「六郎次山」と呼ばれていたが、東武鉄道などの経営、事業に関わった根津嘉一郎（一八六〇～一九四〇）による根津財閥が土地の一部を所有していたことから「根津山」とも呼ばれるようになった⁸⁾。櫟や松が生い茂る林ではあったが、手入れもされ踏跡道もついており散策道にもなっていた。しかし、第二次世界大戦に入ると防空壕が掘られ木々も燃料として伐採されてしまうこととなる。



羽根木公園周辺地図

(地理院地図 / GSI Maps - 国土地理院ホームページより)

北は、羽根木公園との縁を次のように綴っている。

羽根木公園と私は少しゆかりがある。(中略)

その当時、羽根木公園の一带は、根津山といつてクヌギやナラの森林であったものだ。虫好きの私はよく、夜出かけて行って、樹液に集まるカブトムシやカナブンを捕えた。梅ヶ丘はその頃は郊外であったから、ふつうのカナブンのほかに珍しいクロカナブンもいた。樹液には夜蛾のたぐいやゲジゲジも集まってくるので、広大な根津山はなにか怪奇じみて幻想的に思われたものである。¹⁰

無類の昆虫好きであった北は幼少の頃、根津山へ昆虫採集に出かけていた。

当時の北は、現在の東京都港区青山に暮らしていたが、母・輝子の別居を契機として世田谷へと通うようになった。

一九三三年一月、北が六歳の頃に発生した、通称「ダンスホール事件」¹¹に輝子が関わっていたことにより、彼女は夫・斎藤茂吉の怒りを買ひ、家を出ることを余儀なくされた。北や兄弟は母親の失踪の理由を一切聞かされておらず、彼らが輝子の居場所を知るのとはそれから一年が経ってからのことで

あった。¹²

家を出た輝子は滞在場所を転々としながら、最終的に世田谷区松原にあった、輝子の弟・斎藤西洋の家で過ごすようになる。彼の家は、火災を機に青山から松原に移転された青山脳病院本院の、その脇に構えられていた。北は次第に、兄弟と共に松原の母のもとに会いに行くようになり、その際に近所にあった根津山へ足を運んでいたのであった。

根津山には、青山の自宅周辺にはいない虫も生息しており、「檜や櫟の樹液に集まる昆虫類の宝庫」であったという。¹³

根津山へは夜に向かうことが多かった。樹液に来る虫は夜のほうが多く集まるからであった。北は、深山を思わせる樹木の林立している夜の根津山へ一人で向かうことに怖さを感じていたため、決まって従兄弟についてきてもらっていた。

短篇「根津山」(「母の影」所収)では、夜の根津山探検の様子が鮮明な感動をもって綴られている。

ともあれ、今も私ははっきりと憶い出すことができる。

漆黒の夜の、あの深山の森林のごとくひっそりとした夜気を。懐中電灯の淡い光の輪の中に、足元につづく落葉のたまった湿った土の径を。更に、懐中電灯をあげてみ

ると、櫓のざらざらした黒ずんだ幹が幽玄に浮びあがる。その太いのや細いのや奇怪な幹の列は、側方にも前方にも無限に続いているのである。その中を、私たちは足音を忍ばせて縫ってゆくのだった¹⁴。

視界のはっきりとしない深山の中を、五感を研ぎ澄ませながら彼らは歩いてゆく。特に、樹々の肌の感触や靴で踏みしめて歩く湿った土の径の質感という、自然界が生み出す現象を目の前で体感しているかの如き筆致で綴っていく。

いた、いた。ざらざらとした太い幹から泌みでる甘美な蜜の上につどい這いずっている甲虫たち。カブトムシはいかめしい角をふりたてて上方にへばりついている。その下方に七、八匹のふつうのカナブン。それらはもう何十匹となく捕えているから、多少翅鞘の色の変った奴を見つけたときにはのみ毒管に入れる。しかし、目ざす獲物はこの樹にはいない。

また幹に手をつきつつ、小径とも言えぬ落葉のたまった土の上を歩く。今度のあの樹には？　そう、折るように期待していたとおりだった。私はついに発見する、漆黒

の夜よりも黒く光沢のあるクロカナブンの何とも形容しがたい姿を。私の心は何ものへともつかぬ歓喜に満ち満ちる。手をのばして、私にとっては宝石と言ってよいその甲虫を掴む。しばらく肢を動かしているその姿を、昆虫マニアのみが知るおののきと共に眺めやる。それから毒管に入ると、その黒く固い天使は、肢をちぢこませ、やがて息絶える。ああ、根津山の夜は少しこわかったけれど、私にとってかけがえのない憧憬に満ちた天国と呼んでも誇張ではない場所だったのだ¹⁵。

本作は回想の形ではあるが、夜の根津山の場面は史的現在で描かれ、クロカナブンとの邂逅が臨場感を有して綴られている¹⁶。当時の北にとって根津山は「憧憬に満ちた天国」であったが、一九四五年、第二次世界大戦中の空襲によって焼き尽くされてしまう。百箱に及ぶ彼の昆虫標本のコレクションもこの時すべて灰となってしまった¹⁷。

2 根津山と戦災

当時の根津山を知る世田谷区民の戦争体験の「語り」が残

されている。

根津山は子どもたちの絶好な遊び場でした。クヌギ、ナラ、カシの木などの雑木林と笹が生い茂り、武蔵野の面影が残っていました。

戦時中は町内会総出で、防空壕を掘ったんですよ。

戦争末期の昭和二〇年五月二五日アメリカ軍の空襲で、梅丘を狙った焼夷弾が西からの強風にあおられ、そのほとんどもが根津山方面に流れたおかげで町の大部分は焼失を免れたんですよ。しかし梅ヶ丘駅周辺の一部の商店や住宅が焼けました。

（鈴木壽氏、インタビュー当時七三歳¹⁸）

同日の空襲について、当時代田二丁目に住住していた区民の手記も紹介する。

五月二五日 金 晴

きのうの空襲でまだあちこち痛むからだをもて余しているうちに、内心恐れていたサイレンがびびき渡った。電

燈を消す。闇の中にラジオの一点の灯ブザーがピーツ、ピーツ。「東部軍管区情報。東部軍管区情報。警戒警報発令。敵大編隊は南方洋上を北上しつつあり」（中略）突如、敵の編隊に小さな味方戦闘機がツ、ツーツと近くと見るや、サーチライトの光芒の中で体当たり、二機はたちまち火を吹き、根津山の山かげの方角にきりもみに墜落する。

「あッ、落ちて来る!!」耳もとで妹が叫んだ。ザ、ザ、ザーツ。ストーン、ストーン、耳をつんざく音。瞬間に池の面全体が燃え上がる。黒煙と真紅の炎が三メートルも吹き上がる。松の太木がいく本も立ったままバリバリと燃え、梢から火の粉をまき散らす。闇夜は一瞬に火の海と化し、しおり戸も植込みも生けがきも、庭じゅうがゴウゴウとうなりながら燃えている。（中略）

全身の力をふりしぼり、自らをむち打ち、敢闘すること四時間余り。ついに消しとめた。全身ぬれねずみ、腕のつけ根は焼けつくような疼痛。黒煙と火の粉にやられた目は痛み、のどは苦しく、声を出す気力もない。

明け方になっていた。薄明りに見廻す周囲は目の届く限り、一夜のうちに無惨な焼け野原に変わっていた。もう

飛行機の爆音も、声も、なにも聞こえず、静まり返った焼跡のあちこちに遠く近く立ち昇る薄煙が、暁の中に幽霊のようであった。近所の人たちの姿はどこにも見えなかった。すぐ近くの根津山の横穴式防空壕にみんな待避したのでろうか。(中略)

きのうまでのみずみずしい緑、若葉のかおる五月の風を思い浮かべながら、悪魔の所業にも似たこの暴戾さに、つき上げる憤りをどうすることもできなかった。

(杉山杜美子氏、一九四五年当時二二歳)¹⁹

根津山とその一帯に被害を及ぼした一九四五年五月二四、二五日の空襲は世田谷区にとっても最大規模となるものであった。それまで被害の少なかった区部の残存部を潰滅させ、被災者数は両日合わせて四万人以上にのぼった。²⁰

そして、これらの空襲によって、斎藤家は青山の脳病院分院を失った。一家は青山で被災し、また松原の脳病院本院はすでに東京都へと移譲されて「東京都立松沢病院 梅ヶ丘分院」となっていたため斎藤家の手を離れていた。北は終戦間近になって旧制松本高校に入学したため東京を離れており、焼失した病院を見たのは被災から、そして終戦から一年以上

経ってからであった。北が旧制松本高校時代につけていた日記によれば、病院の跡地に赴いたのは一九四六年二月二九日―三一日と推察される。

12月31日

29日に東京へ帰った。冷いしみる様な寒さはさすがに感ぜられぬ。(中略)

梅ヶ丘の鼠〔根津〕山はなつかしい。初めて病院の焼跡を見た。トタン屋の中に灯がついて、防火壁のみ寂しく立っていた。正門前の建物は残っていて、住宅の方は何の被害もない様だ。何とか云う表札がかかっていた。一寸した感慨が胸をかすめた。²¹

また、北は翌年春の帰省の際にも根津山へ足を運んでおり、三月一九日に記された日記には、その様子が詳らかに綴られている。

自分はそれから梅ヶ丘へ出て、ピーナッツを一袋買ってネズ山へ登って行った。日は当たっていたが風が冷たかった。ここにも幼い時の、いやほんの少し前の、だがもう

昔の様な気がする思い出がある。くぬぎや檜も炭にするため伐られてしまった。笹だけが風に吹かれてサラサラと鳴った。と足音にオドロいて見知らぬ鳥が十数羽飛び立った。これだけの木立でも、これだけの鳥があつまる。
(中略)

あまり寒いので山を下りた。麦がこんなにも大きくなっている。一つの家の庭に梅が咲いていた。ドブ川を一つわたりかけたら、ここにも大きな思い出が残っていた。この川にササ舟や板キレをうかべて昌子〔妹〕や透ちゃん、喬ちゃん〔ともに従兄弟〕などと、この岸をかけながらついで行つたのは、あの頃だった。梅ヶ丘の停車場を見つけて、随分遠くへ来たなと思ったあの頃。恐らく麦がのびていたに違いない。²²

根津山の樹々はすでに刈り取られており、かつての怪奇じみた様相は消えてしまっていた。

空襲により根津山は荒れ果て、そして脳病院本院と通い慣れた叔父の家も別の人の手にわたってしまったことで北とこの土地の関係は途切れてしまっても不思議ではなかったが、世田谷と斎藤家にはまだつながりがあった。終戦の翌年であ

る一九四六年に輝子が代田に家を見つけ、長男の茂太らと住み始めたのであった。その翌年には茂吉も山形の疎開先から引きあげ、一家で住まうようになる。なお、当時の北は引き続き松本に、そして卒業後は東北大学医学部進学を機に宮城県仙台台市に移住したので同居はしていなかったが、帰省する際はこの家に寝泊まりをしていた。²⁴

代田で新たな生活を始めた斎藤家ではあったが、約三年後の一九五〇年には新宿区大京町へと転居することになる。それにより北と世田谷はまた縁が切れてしまうのだが、両者を再び繋ぎ止めたのが一九六〇年の『どくどくマンボウ航海記』のヒットと同年の『夜と霧の隅で』での芥川龍之介賞受賞、そして翌年の結婚であった。同年、新居を立てるための土地を探していた北は、『航海記』の担当編集者であった中央公論社の宮脇俊三²⁵から松原の彼の自宅の隣にあった土地を紹介され、そこへの居住を決めることとなり、その後生涯を通してこの地に住まうこととなった。²⁶



図1：1936年8月（丸印：青山脳病院本院）



図2：1947年9月



図3：1963年6月



図4：2019年11月

図1と4は根津山と羽根木公園の空中写真である(出典…地理院地図/GSI Maps・国土地理院ホームページ)。図1が一九三六年八月、ちょうど、北が輝子に会いに世田谷に通っていた時期と重なる。中心に見える森林が根津山で、丸印で囲っている建築物が青山脳病院本院である。

図2は一九四七年九月、北が春の帰省で根津山を訪れたのがこの年の三月であった。戦前と比べて山肌が禿げていることがわかる。なお、青山脳病院本院はこのときすでに東京都に移譲されて東京都立松沢病院分院となっており、斎藤家の手を離れていた。

図3は一九六三年六月、根津山は開発され、この時にはすでに羽根木公園として開園している。松沢病院分院は一九五二年一月に東京都立梅ヶ丘病院となっている。

図4は二〇一九年一月、周辺の宅地化が進み、小田急小田原線も高架化するなど、街の姿が大きく変わっている。梅ヶ丘病院は二〇一〇年に閉鎖され、跡地には東京リハビリテーションセンター世田谷が設立されている。

四、「駿馬」における主人公「私」と北杜夫

1 「私」の老いと「死」への意識

ここまで、作品の舞台となった羽根木公園、そしてその前身の根津山について、北とのかかわりを挙げつつ述べてきたが、以上のことを踏まえた上でここからは「駿馬」の作品の全体像を見ていく。

第二章にてあらすじを紹介したが、本作は主人公である「私」が妻、娘夫婦、孫とともに羽根木公園で開催されている「梅祭り」へ出かけるところから始まる。この主人公「私」の人物像は序盤から明示されている。世田谷区松原に居住し医者としての経験があり、同時に作家生活を長く続けてきた彼は足腰を悪くしており外出をあまりせず、かつ面倒臭がりである人物として描かれている²⁷。これらの要素からも、主人公とその家族のモデルが北杜夫一家であると考えられる。実際、主人公「私」の家族構成と北一家の構成は合致しており、作中では登場人物の名前こそ明かされずに物語が展開されていくが、唯一「孫」のみが実際の北の孫と同じ愛称の「フミ君」と呼ばれる場面がある²⁸。

本作の序盤では、「私」が老いと同時に日常の中で「死」を意識する場面が登場する。「私」が大地震を恐れる箇所がそれに該当する。

ただ、今年は異常気象であって、春になっても初夏になつてもうそ寒い、それどころかはつきり寒い日も多かった。私は、いよいよ大地震が襲ってくるのではあるまいかとまで疑った。そろそろ大地震のくる周期で、関東大地震以上のマグニチュード八くらいの異変があつても少しも不思議ではない。(中略)

私は妻に尋ねた。

「あの地震用に買った非常用袋はどこにあるんだね？」

「さあ……、どこだったかしら」

「阿呆。何のための非常用ザックなんだ！　すぐに捜して、おれとお前の寝室に置くようにしてくれ」

「でもあなた、あれを買ったのは何年も前のことよ。もう水だつて腐っているでしょうし、缶詰だつて危ないもんだわ。それにあれは重たいから、あなたが担いでヨタヨタ歩いたら、それこそ死ぬ危険のほうがずっと多いでしょう」

私は妻の言葉に反論することができなかった。

「私」は異常気象を大地震の前触れなのではないかと疑い、妻に非常用袋の場所を尋ねるが、心もとない言葉が返ってくる。その上「あなたが担いでヨタヨタ歩いたら、それこそ死ぬ危険のほうがずっと多い」と反論され、「私」は自分を情けなく感じている。この引用からも、「私」は老いてゆく中で避けられない「死」の接近と、地震という自然現象による「死」の予感に挟まれながら生きていることが読み取れる。どちらにせよ人間の力では逆らうことのできない事象である。

さて、その「梅祭り」の日、孫が滑り台で遊んでいる間、私は閑だったので煙草を喫い、かつこの夏の乗馬に備えて木馬にまたがってみた。すると、しよせん素人ではあるが、かなりの歳月馬に乗ってきただけあって、膝がかなりきつく締まるのを実感した。私が乗馬を覚えた頃は、まだ軍隊式に膝を締めることを教えられたものだ。(中略)

とにかく、木馬に子供のようにまたがってみて、足腰がすっかり弱っているにもかかわらず、膝を締める力はあ

んがい残っているようなので私は安堵した。昨夏は肝臓をこわして一枚も原稿を書けず、だるくてだるくて鬱気味になってしまい、馬に乗るどころではなかった。

「私」は、自分の不健康を省みて、この夏には軽井沢で乗馬をし、身体を鍛えようと考えている。ここで、「私」は医局に勤めていた頃の夏休みの軽井沢のことを回想する。夏の軽井沢で乗馬をしたというエピソードも、北の実体験に基づくものである。北は、毎年、夏に軽井沢へ行くと頻繁に乗馬を行っていた。²⁹「私」は、梅祭りの行われている羽根木公園で孫が滑り台で遊んでいる間に、乗馬に備えて遊具の木馬にまたがってみる。彼は、足腰が弱っているにも関わらず、長年の乗馬の経験もあり膝を締めてまたがる力が残っていることに安堵するのであった。

そして「私」は家族とともに公園の屋台街の方へと向かうのだが、人混みの中、その人いきれと屋台から来る炭火の熱気により意識が朦朧とし、それを契機として戦時中の幻覚を見ることとなるのであった。

2 戦争体験

戦時中の北はまだ一〇代であり、終戦を迎える一九四五年に旧制松本高校へと入学している。それより前は青山の実家で生活をしており、実際に彼自身が空襲の被害に遭っていたことは先述のとおりである。特に、第三章第2節にて取り上げた五月二五日の空襲では、自宅と脳病院が全焼してしまう。終戦後、一九四五年の大晦日に、北は日記にこの日のことを回想の形で記している。彼がこれまで書き溜めていたものは五月の空襲によってすべて灰となってしまったため、前述の根津山について記されたものも含め、この日記は空襲後から新たに使い始めた日記帳に記されたものとなる。

5月25日夜半の空襲は、なつかしい青山の家も病院も一切を空にした。あの日、原に逃げて焼けおちる病院を眺めて居た事を考えると、皆夢の如き気がする。一切が悪夢だったのだ。焰、風、全くこの世のものとも思われない。今から考えると全く不思議な感じがする。³⁰

また、後年には当時のことについてエッセイの中でも記している。空襲の中、北は青山墓地付近で避難をしていたが、

目の前にあつた薪が火の粉をあびて燃え始める。彼はそれを家族とともにバケツ・リレーで水をかけて消し止めた。

それからついこう考えた。家から歩いて五分ほどのところに御幸通りという広い道路がある。これは今は青山墓地まで続いているが、当時は途中までしかできていなかった。当時の概念で言うところ、相当の幅を持つ大道である。すでに避難者の群は去つたが、まだがんばっている者もいるであろう。その人たちと一緒に水をかけてあげれば、あの広い道路のところで火勢を抑えることができるかも知れない、と。

そして私は実際に単身、青南小学校での細道を水を入れたバケツを持って走って行つたのだ。そしてその小路を出たとたん、無数の火の粉をまじえた熱風をともにあびて、道にばったりと倒れてしまった。しばらく息がつけなかった。それからようやく死物狂いの努力でじりじりと這い、壁で熱風からさえぎられている小路に戻るこゝとができた。(中略)

御幸通りの広さを過信して熱風に打ち倒されたとき、ほんの一、二分時間がずれていたならば私は死んでいたか

も知れない。あの空襲の翌日には、参道の入り口に焼けただれた死体の山が二カ所もピラミッド状に積みあげられていたのである。³¹

北は消火に躍起になっていたが、無数の火の粉をまじえた熱風をあびて、道に倒れてしまう。彼は死物狂いで這い、熱風の来ない小路に戻る。北がまさに生死の境目にいたということは翌日に目に飛び込んだ惨状からも窺える。

また、この空襲で北は目に火の粉をあび、しばらくの間片目が開かなくなってしまう。このエピソードは他作品にも記されており、戦争体験として北の脳に強く焼き付けられていることが読み取れる。例として『どくとるマンボウ追想記』には、「ほとんど四方の夜空が紅に染まり、かつ嵐にも似た熱風が吹き起つていた。時間が経つにつれ、空全体が紫がり、三月十日の夜間空襲のときよりまただならぬ様相を呈してきた」「脳病院の原っぱを通つて、私たちは立山墓地に脱れたが、その際、火の粉がはいって、私の片目が半盲になった」と記されている。³²

北のこの戦争体験は「駿馬」本文中でも登場する。主人公「私」は、幻覚の中で戦場を駿馬に乗って脱出したのちに十

四、五歳と思われる少年兵に出会うが、彼らは片手に
バズーファウスト
 戦車拳骨と呼ばれるバズーカ砲を構え、玉砕の決意があり
 ありと現れている眼差しをしていた。あどけない顔ながらも、
 「それまでに出会ったどんなドイツ軍人よりも、まだ少年で
 ある彼らは鋭い目を痛いまでにきつと瞋み、小さなくちびる
 を固く結んでいた」のである。

「私」はそのような彼らの姿を見て、かつて軍国少年だった
 戦時中のことを頭の中でよみがえらせる。しかしながら、
 「私」は、目の前にいる少年兵と異なり、「自分は現実に死に
 直面した訳ではない」と語る。

この私にしても、かつては完全な軍国少年であって、自
 宅を大空襲で焼失したあと信州の旧制松本高校の思誠寮
 にもぐりこんでいたが、もし敵軍が本土へ上陸してきた
 ならば、たとえ歩いてでも戦場まで辿りつき、爆雷を抱
 いて蛸壺壕にもぐり、自らの死と共に敵の戦車一台くら
 いを追っけにしてやろうと本気で念じていたものだ。

しかし、私は現実に死に直面した訳ではない。家があつ
 た青山一帯が焼けはてたときには、私は一般民衆や近く
 の小学校の屋上に陣地を造っていた高射砲部隊も逃げ去

ったあと最後まで残り、危うく死の一、二歩手前まで
 行ったものだったが、家の隣りは広い原っぱで、その向
 こうに樹木が茂り火災も起らぬであろう立山墓地、更に
 青山墓地があつたから、生き長らえることができたのだ。
 だが、たつた今、私が目撃した少年兵たちは明瞭に死を
 覚悟した顔つきをしていた。そして、その覚悟は現実にな
 ることであろう。少年までが祖国を救おうとして、こ
 のように毅然として敵の戦車を待ち受けていたのだ。

この「現実に死に直面した訳ではない」というのは、この
 少年兵とは異なり武器を手に戦地に赴いたことがない、とい
 うことを指しているのだと考えられる。菅野昭正は文庫版解
 説にて、北の「戦場に駆りだされることはなかったものの、
 あの恐ろしい戦争の日々を無力な若者として過ごした記憶」
 が、戦場の幻覚が明瞭に「悪夢的な臨場感」を有して描かれ
 た理由であると述べている。³³ 主人公「私」は少年兵らの姿に
 涙が溢れ、視界がぼやけてゆき、元居た羽根木公園に戻つて
 くるのであった。

3 「空気」への意識

続いて、本作に於いて幻覚を引き起こす契機となる存在である「空気」について本文を取り上げながら検討していきたい。羽根木公園から戦時中のドイツへと移るきっかけが、人いきれと屋台から来る炭火の熱気であることは先に述べたが、本作では物語の展開における重要な要素として随所に「空気」や「大気」への言及が見られる。その日は気候も良く、暖かな空気の中に熱気が加わっていたことがわかる。

とにかくずらりと並んだ屋台の辺りは、人混みをかきわけるようにしないと進めなかったし、トウモロコシやイカを焼く火、おまけに人いきれで、樹木の多い清浄なはずの大気も、そこだけはムツと濁っているようだった。

おまけにその日は珍しく晴天でかなり暖かい日であったから、減多に散歩もしない私はもはや疲れ、なんだかこれから家まで帰る短い距離さえ大儀のように思われ、トウモロコシを焼いている屋台の前では息苦しささえ感じた。

菅野昭正が『消えさりゆく物語』収録作品には「不快さ、

重苦しさ、醜さ等々に汚染された現実から、できれば遠ざかっていたいという心の姿勢」が見て取れ、その不快感が膨れあがり幻覚を引き起こすと述べていたことは第二章にて触れた。本作に於いて幻覚を引き起こした「不快さ」は、この「人いきれ」と「屋台から漂ってくるトウモロコシやイカを焼く炭火」であったが、これはそのまま、先ほど紹介した北の空襲の体験を連想させる要素となっていると言えるのではないか。

改めて、本章第2節での各文献の引用を確認したい。それぞれ戦争体験についての記述であるが、「焰、風、全くこの世のものとも思われぬ」（『憂行日記』）、「無数の火の粉をまじえた熱風をまともにあびて、道にぱたりと倒れてしまった」（『生き残りの記——私の昭和』『マンボウ氏の暴言とたわごと』）、「嵐にも似た熱風が吹き起っていた」（『どくともマンボウ追想記』）とあり、戦争と「熱気」が彼の記憶の中で紐づいていることがわかる。この戦争の記憶と結びつく「熱気」が引き鉄となつて、「私」は戦時中の幻覚を見たのだと考えられるのではないか。

本文に戻る。幻覚を見るときに加え、戦時中の幻覚から羽根木公園に引き戻される際にも、「空気は澱んで、ムツとし

た人混みを感じられた。また目を閉じ、二分ほど心に落ちつけ落ちつけと言いきかせたのち、目を開くと、私は羽根木公園の屋台街に佇んでいるのだった」とあるように、不快感を与える「空気」に関する記述がなされている。³⁴この場面は戦争体験の項で示した、敵の戦車を待ち受けている少年兵と出会う場面の直後に現れる。つまり、序盤では「空襲を連想させる熱気」により戦時中の幻覚を見たのに対し、この場面では少年兵の姿を目の当たりにし「私」自身が自分の戦争体験を明確に思い出したことによつて感情をゆすぶられ、現実世界の「空気の澱み」が現われたのだと言える。この点から、**「私」の戦争体験には「空気」への意識が紐づけられていると考えられよう。**

一方、「不快な空気」の対立項として存在するのが、羽根木公園の梅林の中の空気と、幻覚の中のベルリンの並木道の空気である。そもそも、「私」は羽根木公園の空気を「樹木の多い清浄なはずの 대기」と捉えていた。その澄んだ大気が幻覚の中のベルリンにも広がっている様子が示される。

かなりの樹齢のポプラ並木がつづくようになってきた。

道路から人影は嘘のように消えはてていた。雨も何時の

間にかあがり、どんよりとしていた空からは微光まで射してきて、大気はすがすがしく清澄であった。またしても私は、これは夢か幻覚を見ているのではあるまいかという漠とした疑惑に囚われた。

駿馬に乗って市内へたどり着き、一旦身の安全を感じ安堵しながらも、「私」は先ほどまでと異なる穏やかさに「これは夢か幻覚を見ているのではあるまいか」と疑う。このことから、「ムツとした熱気」が戦争に結び付くのに対して「清浄」あるいは「清澄」な空気は「私」にとつて平和や平穩さに結び付く感覚であると言えると考ええる。

物語のラストシーンでは、羽根木公園に戻った「私」と家族は、人混みを避け梅林へと足を運ぶ。

今のうつつに私が呼吸している清浄な空気が、あの恐ろしい夢か幻覚の中での、ベルリン郊外の並木も多くなつた街路に漂っていたすがすがしい大気に、いかにも似ているようで、それが気になって堪らなかったのである。

「私」は梅林の中で求めていたとおりの「清浄な空気」を

感じるが、それがベルリンの空気と似ているように思われ、気がかりになる。ベルリンの並木道には確かに清澄な空気が流れていたが、すぐに少年兵の姿を目にしたことで、「私」の中で立てられていた「清澄な空気＝平和、平穏」という公式が崩されていく。

彼は、戦地の幻覚が覚めて羽根木公園に戻ってからというもの、現実世界では「平和」と言われながらも、今でも世界の至る所で戦争やテロが発生しているのだという事実について思いを巡らせていた。清浄な空気と世界の混乱は切り離して考えられるものではないということを「私」が感じ取っている、ということをごの箇所からは読み取れる。

五、おわりに

北はかつて、昭和時代を振り返るエッセイの中で自身の戦争体験を挙げつつ、平和と言われながらも、今もなお世界のあちこちで戦闘が行われているというこの現実を「表面上の平和」と表現した³⁵。また、北が本文を担当した一九七七年刊行の絵本『むすめよ…』では、赤みを帯びた空の下で戦車が走っている挿絵にあわせて「平和の なかに いるとね、

平和というものが どんなに ありがたいものか、わからなく なるものだよ」と幼い読者に向けて語りかけている³⁶。

そして、本作『駿馬』も、少年時代の戦争体験を省みつつ、「平和」に対しての一考を促している作品なのではないかと考える。「羽根木公園の梅祭り」は、まさしく平和な日常の象徴であり、幻覚を見なかった「私」の家族はその日常を当然の如く生きている。しかしながら、その「平和で平穏な日常」が広がっている本作の舞台の過去の姿を探ると、北が空襲に遭った一九四五年五月の空襲で同じく甚大な被害を受け、焼け野原となった根津山が現れるのである。

また、羽根木公園が本作の舞台として設定された理由は、単に近所にある公園であるからというだけではなく、北にとつての「世田谷」という土地が持つ特殊な意味合いによるものではないかと考える。

北と世田谷のつながりは、彼の誕生前に青山脳病院が火災で焼失したことを機に世田谷区松原へ移転したことから始まるが、物心がついてからの最初の大きな出来事は、母・輝子の別居であった。離れて暮らす母に会いに、松原へ通い、近所にあつた根津山で昆虫採集に熱中するが、戦争によって病

院もかつての根津山の姿も失われ、自身も松本で寮生活をするようになったことで世田谷との縁は切れてしまう。しかしながら、家族が代田に家を購入し、そこに住み始めたことで、世田谷は旧制松本高校在学時、東北大学在学時の北の帰省先となった。そして、再び世田谷から離れたのち、北は結婚を機に松原に家を買う。

このことから、北にとって世田谷はさまざまな土地へ向かう際の中継地点、拠点でもあり、同時に幼少期には突然いなくなつた母のもとへと、そして青年期には帰省の際に家族のもとへと、最終的には一家の主として自宅へと「帰るための場所」として存在していたと言えるのではないか。

そして、「駿馬」における羽根木公園は、家族と過ごす平和で平穏な日常の象徴でもありながら、主人公「私」にとつては自身の若い頃の戦争体験や軽井沢での乗馬の記憶を呼び起こす場所でもあり、また、悪夢のような幻覚から戻つて来られる場所として描かれている。その根底には、作者である北の、根津山の記憶から始まる世田谷という土地に対しての「帰るための場所」としての認識が存在していたのだと考える。

注

1

焼死後の青山の土地には一九二九年に診療所を建設。松原の病院が「青山脳病院本院」と呼ばれたのに対し、こちらは「青山脳病院分院」と呼ばれた（小泉博明「斎藤茂吉と青山脳病院再建——青山脳病院院長就任——」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』一〇号、二〇〇九）。

2

一九六九年の『三田文学』（三田文学会）を皮切りに、一九七三年に『國文學——解釈と教材の研究』（学燈社）、一九七四年に『國文學——解釈と鑑賞』（至文堂）、一九七五年に『別冊新評』（新評社）にて北杜夫特集が組まれ、一九七八年には奥野健男による論集『北杜夫の文学世界』が中央公論社より刊行された。

また、『三田文学』での特集と同年の一九六九年に、北作品の愛読者によって組織された「北杜夫小研究会」によつて、北へのインタビューや年譜を収録した『北杜夫ノオト』が刊行された。なお、本研究会の幹事長であり本書の編集兼発行責任者を担当した青田吉正は、のちに「斎藤国夫」の筆名で『北杜夫全集』等に掲載された年譜の作成や、北の青年時代の日記をまとめた『憂行日記』（新潮社、二〇二一）の編者などを務めている。

3

一九七六年九月から一九七七年一月にかけて全一五巻を刊行。

4

本書刊行ののち、北が亡くなった直後に刊行された『巴里茫茫』（新潮社、二〇一一）まで小説作品は書籍化されていない。

5

菅野昭正「解説」北杜夫『消えさりゆく物語』二〇一一—二〇三頁、新潮社、二〇〇三

6

戸田一康「北杜夫の『消えさりゆく物語』——自己イメージを打ち破る試み——」『台湾日本語文学報』四八号、

- 二二〇〇
「羽根木公園パンフレット」世田谷区みどりとみず政策担当部公園緑地課北沢公園管理事務所、二〇一五
- 7 注7に同じ。「根津山」という呼称の由来に関しては、羽根木公園内に世田谷区によって設置されている看板でも同様の説明がなされている。
- 8 三田義春『都市美せたがや叢書3 世田谷の近代風景概史』五二頁、世田谷区企画部都市デザイン室、一九八六
- 9 北杜夫「また季節外れの話」『マンボウ酔族館』二四七頁、新潮社、一九九二
- 10 銀座のダンスホール教師が常連の有閑マダム、令嬢、芸者等を顧客に情痴の限りを尽し、目にあまるその不行跡に、警視庁不良少年係が同人を検挙した事件（北杜夫「神河内」『母の影』三二頁、新潮社、一九九七）
- 11 北杜夫「根津山」『母の影』四一頁、新潮社、一九九七
- 12 注12に同じ（四九頁）。
- 13 注12に同じ（五〇頁）。
- 14 注12に同じ（五一頁）。
- 15 「根津山」本文中では、「少なくとも東京でクロカナブンを採集したのは根津山だけだったと思う」と記されている（注12に同じ、四九頁、新潮社、一九九七）。
- 16 「北杜夫全集」第十五巻、三六二頁、新潮社、一九七七
- 17 中野元之編『わが町梅丘』七頁、二〇〇三。中野は本書発行当時の梅丘一丁目町会長。
- 18 「世田谷近・現代史」一〇三五—一〇三八頁、東京都世田谷区、一九七六
- 19 注19に同じ（一〇三—一〇三四頁）。
- 20 北杜夫著、斎藤国夫編『憂行日記』一八一—一八二頁、新潮社、二〇二一。□内は編者による注。
- 21 注21に同じ（一九八—一九九頁）。□内は筆者による注。
- 23 斎藤茂太（一九一六—二〇〇六）。明治大学文芸科、昭和医学専門学校を卒業後、慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程にて医学博士号を取得。精神科医として働く傍ら、作家としても活動した。著作に『茂吉の体臭』（岩波書店、一九六四）、『回想の父茂吉 母輝子』（中央公論社、一九九三）等。
- 24 北杜夫「世田谷と私」『世田谷文学館開館5周年記念 北杜夫展』七頁、世田谷文学館、二〇〇〇
- 25 一九二六—二〇〇三。一九七八年に中央公論社を退社したのは紀行作家としても活動した。著作に『時刻表2万キロ』（河出書房新社、一九七八）、『最長片道切符の旅』（新潮社、一九七九）等。
- 26 北杜夫「因縁のある松原」住まいの図書館出版局『住まい学大系』014 東京セレクトション「花の巻」三六—三七頁、星雲社、一九八八
- 27 北杜夫「駿馬」『消えさりゆく物語』六五—六六頁、新潮社、二〇〇三
- 28 注27に同じ（一一六頁）。エッセイ「孫あれこれ（その一）（『マンボウ酔族館 パートIV』六四頁、実業之日本社、一九九五）等でこの呼称が用いられている。
- 29 北杜夫「マンボウの素人乗馬読本」三四—三五頁、新潮社、一九九〇
- 30 注21に同じ（一〇五頁）。
- 31 北杜夫「生き残りの記——私の昭和」『マンボウ氏の暴言とたわごと』二四六—二四七頁、新潮社、一九九四
- 32 北杜夫『どくどくマンボウ追想記』一九七一—一九八頁、中央公論社、一九七九
- 33 注5に同じ（二〇三頁）。
- 34 注27に同じ（一一五頁）。
- 35 北杜夫「一人の昭和つ子として」『マンボウ氏の暴言とた

36

わごと』二四一頁、新潮社、一九九四
 北杜夫、鈴木博・画『小学館の創作童話シリーズ』³⁸ むす
 めよ：——どくとるマンボウの おくりもの——』三四
 一三五頁、小学館、一九七七。
 北は、本作発表前にも「平和」をテーマにした文章を青少
 年向け（本文中では「小さな皆さん」）に執筆しており、
 平和の重要性と平和を保つことの難しさを説いている（北
 杜夫「平和：君たちの手で」『毎日新聞』一九七六年一月
 一日）。本作はのちに「平和」へと改題し、『マンボウ博士
 と怪人マブゼ』（新潮社、一九七八）に収録。

（わかい・たける 成城大学大学院博士課程前期修了）